特別連載

トップが語る

建築士などの資格取得を支援する
建築業界のさまざまな分野を牽引
業界の明日を担う若手、業界を目

総合資格の岸隆司社長が、
する企業のトップや建築家と対談し、
指す学生へのメッセージを発信します

これからの建築 第82回 岸 隆司

株式会社総合資格
代表取締役

きし・たかし

1950年鳥取県生まれ。'69年、鳥取西高校卒業。'73年、関西大学卒業。'80年、名古屋市に㈱中部資格協会を設立。'87年、東京に㈱総合資格協会（現㈱総合資格）を設立、代表取締役に就任。全国90余拠点に教室をもつ総合資格学院の学院長として、優秀な建築技術者育成のため陣頭指揮をとっている

これからの人材 奥村 太加典

株式会社奥村組
代表取締役社長

おくむら・たかのり

1962年奈良県生まれ。'86年、中央大学理工学部土木工学科卒業。同年、奥村組入社。'94年5月、関西支社次長。同年6月、取締役。'95年、取締役東京支社営業部長。2001年4月、常務取締役および営業担当。同年12月、代表取締役社長

「堅実経営」と「誠実施工」の2本の柱をモットーに創業

岸―貴社は、ここ数年業績も大変好調で、準大手ゼネコンのなかでも突出して待遇がよく、また女性にも人気の会社とうかがっています。今日はそんな奥村組の魅力に迫っていきたいと思います。まずは会社の沿革を教えていただけますか。

奥村―奥村組は、初代の奥村太平が土木建築請負業に入職した1907（明治40）年を創業の年としています。生家のある現在の奈良県香芝市の隣町に森本組さんがあり、森本組さんが事業拡大で新たに人を募集したときに、御縁があって郡役所に勤めていた太平が応募したのです。その後、'21（大正10）年に太平が森本組さんから独立し、奥村組が発足しました。

岸―そうだったのですか。初代はどのような理念で独立されたのでしょう。

奥村―創業当初から「堅実経営」と「誠実施工」という2本の柱をモットーとしていました。今も、「堅実経営・誠実施工を信条に、社業の発展を通じて広く社会に貢献する」を経営理念にしています。堅実経営というのは、寿命の長い建造物や建築物をつくるわけですから、長期にわたってメンテナンスを行うためにも会社そのものが安定していなければならない、万が一何かあればすぐに駆けつけて構造物や建築物を守るのだという気概です。また、土木でも建築でも、もし品質に問題があれば人命にかかわるので、徹底的に品質にこだわる誠実施工を何よりも大切にしています。

岸―土木・建築が貴社の柱であることはずっと変わらないと思いますが、近年はさらに幅広く事業展開されているとお聞きしています。具体的にはどんな事業ですか。

奥村―収益基盤を強固にするべく不動産事業を拡大したり、新たにバイオマス発電所の建設を始めたりしています。ほかにもいくつものタネをまいています。

岸―本業にこだわらない幅広い取り組みですね。

奥村―ええ、建築や土木の周辺領域のほうがこれまでの知識や経験を生かせるのでしょうが、そこにこだわらずにもっと踏み出して考えていくということです。

建築では免震技術、土木では掘削技術のトップランナー

岸―貴社は日本初や世界初の技術を多くおもちですが、なかでも免震技術についてはパイオニアですね。

奥村―茨城県つくば市に技術研究所がありまして、そこで基礎研究をして現場で実用性を高めています。免震については、'80年に研究所の研究員が技術論文を見つけて、福岡大学の先生と一緒に研究させていただき、'86年に日本で初めての免震構造の実用物件として技術研究所の管理棟をつくりました。現在も、その建物で使われている免震ゴムの構造性能や耐久性の試験を10年おきに行い、性能の経年変化を検証しています。

岸―それはまさにパイオニアだからこそできる試験ですね。土木分野ではどのようなものがあるのでしょう。

奥村―例をあげるとシールド工法や推進工法などの掘削技術でしょうか。この2つの工法による施工延長は、業界トップクラスと自負しています。

岸―それもすごいですね。そういった技術の一端に、一般の方が触れられる機会はないものでしょうか。

奥村―創業の地である奈良に「奥村記念館」があって、そこでは当社の歴史や技術について一般の方にも分かりやすく解説した展示をしています。

岸―創業の場所が記念館になっているのですか。

奥村―いえ、創業の地には今も私が住んでいます（笑）。記念館は、創業100周年を機に、もともと事務所があった奈良市の東大寺のほど近くに建設しました。当社に関する展示だけでなく、休憩スペースを設けて無料開放していますので、多くの方に利用いただいています。海外の人たちに英語で対応する観光ボランティアスタッフの拠点にもなっています。

奈良県奈良市にある奥村記念館。得意技術の「免震」を採用しており、実物の免震装置の設置状況も見学できる

人物撮影＝岡田尚子

岸―そうでしたか。今度奈良に行った際には立ち寄ってみたいですね。

奥村―ぜひお立ち寄りください。現在年間で25万人くらいの方にご利用いただいています。

小さなころから身近だった「建設」を自然と選んでいた

岸―奥村さんは創業家の5代目に当たるわけで、そういう方にお聞きするのも憚られるのですが、建設業に興味をもったきっかけがあればお聞かせください。

奥村―子どものころ、奥村組の作業服を着た人たちが頻繁に自宅に出入りしていました。近所にもたくさん現場があったのでしょうね。そうやって小さいときから「建設」というものが身近にあったのが大きかったと思います。高校のとき適性試験があって、自分が将来どんな職業に向いているかを調べたときも「建設分野」と出ていたので、やっぱり自分には建設が向いているのかな、と。大学では土木を専攻しましたが、土木をやったら建設会社に入りたい。そのように自然な流れで奥村組に入りました。

岸―入社にあたって先代からいわれたことは何かありますか。

奥村―今は建築6割、土木4割くらいの割合ですが、当時は土木のほうが比率の高い、土木主流の会社でした。だから優秀な人材も土木に多い。お前は、その優秀な人たちのなかに入っていくんだぞ、といわれたことを覚えています。

岸―覚悟してやれ、ということでしょうね。特に印象に残っている仕事はありますか。

奥村―現場には8年間出ていたのですが、その間に7つの現場を経験させてもらって、それぞれに思い出はあります。強いてあげれば最初の現場でしょうか。

岸―どのような現場だったのですか。

奥村―岡山の下水道のシールド工事で、倉敷川の下を掘り進むものでした。共同企業体での仕事でしたが、施工延長が2千mを超える工事で、当時では日本最長クラスの工事だったと思います。そこで掘削班に入ってほかの人たちと同じ仕事をやらせてもらいました。今ではマシン操作は専門のオペレーターがやりますが、当時は職員が交代でやっていました。アナログの時代で、マシンのクセを踏まえて操作するわけです。

岸―まだデジタル制御ではなかったんですね。

奥村―ええ。マシンの外径部分にジャッキが等間隔でいくつか付いているのですが、あるジャッキを突くと方向が変わりやすいとか、そういう特徴を織り込んで操作する必要がありました。

岸―難しそうですが、ちょっと楽しそうでもありますね。

奥村―はい。やりがいがありましたね。

マネジメント力をつけるために政治や経済にも関心をもって

岸―これから貴社を目指す若い方たちに向けて、貴社の特徴などをお聞かせください。

奥村―まず、同規模のゼネコンと比較すると、建築設計陣が充実していることが特徴だと思います。そこが強みになって、設計施工でも多様な仕事が受注できています。また、土木と建築の連携も特徴の1つです。2つの事業をまったく別会社のように運営なさっているゼネコンもありますが、うちでは1つの仕事に一緒になって取り組むことも珍しくありません。たとえば難しい地下工事がある建築工事では土木の知識と経験が役立ちますし、鉄道関係の工事で上屋や内装にかかわることは建築の人間が一緒に考えます。

総合資格学院が主催している、建設業界企業研究セミナーでの総合資格ブースの様子。受験資格の変更に伴い、総合資格でも建築系学科に通う学生の採用を積極的に行っている

岸―学生のうちにやっておいたほうがよい、身につけておいてほしいことはありますか。

奥村―基礎的な勉強はもちろんですが、社会に出ると、ポジションが上がれば上がるほどマネジメント力が必要になります。これを高めるために、若いときから政治や経済にも関心をもってほしいと思います。新聞を読む習慣をつけるだけでも、全然違うはずです。最初は書いてあることが分からなくても、毎日読み続けることで少しずつ分かるようになります。分からないなりに、ひと通り記事に目を通すことを続けてほしいですね。

受験資格の変更は大きな可能性を秘めている

岸―貴社の新入社員にはどのようなことを伝えていますか。

奥村―すぐに成果は出ないので、焦る必要はない、ということは伝えています。最初の2～3年は覚えることばかりですが、全員が同じことを経験していくわけではありません。たとえば大きな現場では何らかの工種の担当になりますから、その工種についてはかなり詳しくなる。一方で小さな現場では、何でもやらなければならないので、浅いけれども広く覚えることができる。研修などで集まったときに同期と話をして、自分の知らないことを人がやっていると、自分が遅れていると考えてしまうようなのです。しかし、数年やっていくうちに、だいたいみんな同じように身につけることができる。これは間違いありません。ですから目の前のことだけで焦るな、と。

岸―なるほど。若いうちはどうしてもすぐに結果を求めたくなりますからね。1級建築士資格は何歳くらいまでに取得してほしいのか、希望はありますか。

奥村―できるだけ早く取ってもらうのが一番ですが、遅くとも30歳くらいまでには取得してほしいですね。今はずいぶん試験が難しくなっているようですが。

岸―非常に難しくなっています。1つ申し上げると、来年から受験資格が変更されて、1級建築士試験も大学の指定学科を卒業すればその年に受験できるようになります。これまで2級建築士については、就職の内定段階から勉強してもらって、入社した年に資格を取得することをお勧めしてきたのですが、それが1級建築士でもできるようになるわけです。仕事がそれほど忙しくない若いうちに受験できるようになるのは、大きな変化につながる可能性がある。私たちも、そうした新しい状況に対応できる態勢をいろいろと考えています。たとえば大学卒業後1年間総合資格に通ってもらって、試験に合格してから就職するということもあり得るかもしれません。企業にとっては採用の仕方にも影響することなので、そういう状況の変化について真剣に対応を考えていただきたいのです。

奥村―確かにそうですね。意外に大きな変化になるのかもしれません。

岸―ええ。受験対策について私たちにできることがあればお手伝いさせていただきますので、ぜひ今後ともよろしくお願いします。本日はありがとうございました。